

《研究ノート》

世界を横切って人民戦線（二）

平 田 好 成

『フランス民主主義のまえには大いなる未来がひらけている。わたしは政府首班として、新しい勝利を保証するこの静かなる力とともにその未来に向かって挺身していくことを誓う。』

レオン・ブルム首相、人民戦線政府の成立を公表、一九三六年六月五日。

論説。一九三六年の五〇番目の記念日の祝賀は、事件の歴史的重要性は、単に記念の儀式の規模の大きさに推し測られるばかりでないということを、われわれを思い出したばかりである！この機会があれば取られた、稀なそして幸せな大学の主導権は、大きな情報手段によって、そして過ぎ去ったばかりである、年の相次ぐ政府界によって観察された、沈黙を包み隠すことはできない。（『人民戦線とフランス人たちの日常生活』一九八六年九月七八日、パリ第一大学。）人民戦線に捧げられた二つの歴史的なシンポジウムの開催は、人民戦線の固有の歴史の認識において労働者運動の掛け替えない役割を保証する。第一のシンポジウムは、モントルイユ Montreuil で一九八六年六月七日と八日、一九三四年から戦争まで全国的な政治生活の中で人民戦線の地位に集中させた。（全国的抵抗博物館と結合してモントルイユの現代史博物館、労働総同盟社会史研究所そしてマルクス主義研究所によって組織された、一九八六年六月七八日、『一九三六年、反ファシズムと人民戦線、社会運動及び国民史』。一九八六年二月二二日と二三日、マルクス主義研究所 I R M によって組織された、第二のシンポジウムは、国際的局面及び歴史的現象の多様性について自問した。（一九八六年二月二二―二三日、マルクス主義研究所によって組織され

た国際的シンポジウム、『人民戦線、全国的多様性及び国際的局面』。

この雑誌の号は、色々な国においてこの最後のシンポジウムの準備を支えた、野心と協力するよく希望した、研究者たちと連絡を実現された。

論文の全体に取られた、これらの色々な論文は、人民戦線について新しい視線を投げる。われわれを導いた進め方、それは、人民戦線の全国的経験の多様性と当時のユニークな国際的局面を同時に考えることは実りのあるべきであった、考えである。フランスの人民戦線の本質的役割をごまかす問題はない、しかし、人民戦線は、第一の理由で、幾つかの国において、大衆的民衆運動あるいは政府の経験である前に、共産党の戦略上の方向の決定（動向）であったということを忘れられない問題がある。

論文の多様性は、フランスにおける歴史的現実の及びその現実の認識の多様性を反映する。論文が提起する、情報、仮設、総合は、われわれの時代の歴史の中に労働者運動の地位によく考える、すべての人々を興味をそそるように余地のある独得な寄与を表現する、寄与はわれわれらしく見える。

セルジュ・ヴォリコフ S. W. (二)

一

マルクス主義研究所 I R M 歴史雑誌は、特集『世界を横切って人民戦線』として出版された。(五〇、年振り)。一一の論文が、世界の人民戦線に捧げられた。(二七号と二八号、一九八七年第一・四半期。)

第一の論文は、セルジュ・ヴォリコフ Serge WOLIKOW (I R M 編集委員) 『共産党運動の戦略上の方向の決定として人民戦線』である。

人民戦線の方向の決定を考えることは、たとえば仮設が最後の二〇年間起こさせた研究は、仮設にとって弁護してさえ、

仮設から生じる。今日だけに一層多く、これらの研究の必要な総括を越えて、仮設を深く究明するように問題がある。その理由は、問題は、広く仮設を修正するに至らしめることができる。（この論文は、マルクス主義研究所の国際的シンポジウムの第一回の会期から、そしてテーマ、すなわち人民戦線、全国的多様性及び国際的局面的について歴史雑誌から提出された、コミュニケーションの本質を取り戻す（一九八六年二月二日及び一三日）。この号の他の論文は、同じくこのシンポジウムの準備から生じた。他のコミュニケーションは、雑誌の近い配達の中に論文に種をまくであろう。）

この論文において、人々は、人民戦線のイデオロギー的局面及びこの観点から共産党運動によって演じられた役割を取り組むように引き受ける。かかるアプローチは、R=ヴィニエス R. Vignes によって批判された何らかの欠点を避けるという条件で、私に実りのあるように思われる。私は、論文は、人民戦線で共産党諸組織の単なる延長を作り上げる方にある歴史的研究の傾向を告発する時、論文を合致する。だからと言って、たとえ人々は、フランスのケースをモデルとして変革するように避けなければならないということは真実だとしても、諸組織の役割の論文の提訴 *the case* は、私を極端らしく見える。この号の色々な論文によって暗示された比較的な考察は、同時に必要不可欠の中核の基礎的知識を焦点を合わせるため、是非とも必要な努力に義務を課するだけに、いずれにしても、論文は、全く同時に、方法的なそして理論的な諸問題を提起する。

政治史の最も重要な問題の一つは、学問的な用語法によって提起された問題である。これらの政治的用語のあるがままの再開は、困難と混乱の源泉となる。人民戦線の用語は、注目すべきである。すなわち、時期区分における相違は、用語の意味自体について不一致を隠す。一九三四年、一九三五年もしくは一九三六年に人民戦線をデビューさせること、この年一九三六年に人民戦線を追い込むこと、あるいは人民戦線は、一九三八年まで続くということを考えることは、人民戦線の多様な考え方を想定する、はっきりした歴史的評価を表現する。当時、歴史的に構成された政治的用語法の全く使用を排除する必要があるのか。私は、使用は考えない。最後に、用語法の使用の条件を明確にするため、政治的用語法の批判

的再利用を行い、用語法を修正する方がよいのか。(この点について、論文『フランス共産党とコミンテルンの諸関係(一九二五—一九三五年)』、S₁ヴォリコフ、モリス、ストレイズ研究、歴史雑誌C.H.I.M.T.、二五号、一九七八年、参照。)

そのように、私は、フランスのような国において、人民戦線から次のような定義を与えることに恐怖を冒すであろう。すなわち、それは、戦略上の考え方、政府の経験と同様に、労働者階級の周りに構造化された民衆運動を表現する、独創的なスローガンが漸進的に結合されている、政治的時期である。これら三つの局面は、フランスあるいはスペインのような国々において、一九三四年から一九三六年まで次々に配置される。他の場所で、多数の国で全く異なり、そして国際的レヴェルにおいて、現実の民衆運動が存在しない。人民戦線の方向の決定は、これに反して、諸共産党の大部分によって強く勧められる。しかし、同じスローガンは、事実諸党に対して同一の活動を表現するののか。もしも、最後に、人民戦線の具体的な実現の企ては知っていた成功と同時に、失敗を分析することは興味深いとして、ところで、人々は、共産党運動の方向の決定の役割について自問しなければならぬ。C₁マンフロワ C. Manfroy の論文は、この観点から、政治的危機の賭けられているもの及び一九三三年以前その危機を回避するような手段を考えるばかりでなく、次に新しい方向の決定を受け入れるのにその深いためらいを考える、ドイツ共産主義の困難において重い歴史的決定の比重を照明するように長所がある。だからと言って、これらのイデオロギー的決定因で全てを戻す必要があるのか。確かにそうではない、その理由は、決定因は、各々の国において人民戦線の運命を理解するため、少なくとも同時に決定的な実践と経験と切り離せないからである。

われわれは、人民戦線の共産党の方向の決定を呼ぶ問題を検討するように選ぶこと、それは、何時でも及び各国で、人民戦線と共産党の間に同一性があるということを前提としないことである。チュニジアあるいはアルジェリアで、スペインで、フランスあるいはインドシナで状況は、一九三四年から一九三八年まで同一の状況ではないということは真実である。(IRMのシンポジウムを提出された彼のコミュニケーションと同様に、J₁クラン J. Courand の主宰の下、パリ第七大学、一

九三六年二月四日・六日、『一九三六年とアラブ世界』シンポジウムの全体参照。同じく引用された他の国々にとって、一九八六年一月二日と二三日のシンポジウムに対する、ジュアン・トリアス Juan Trias、アントニオ・エロルザ Antonio Elorza、マルタ・ピカロン・マリア・ビザロ Marta Bizarrondo の、シャルル・フルニオ Charles Fourniau の、そしてフランシスコ・アルヌスコ Alain Ruscio のコメント(参照)をここに、社会党は新しい政策の象徴として見分けられるのに、共産党は人民戦線の主要な立役者として現われない。共産党運動は、国際的レヴェルにおいて、創設者の役割を演じた、そして次に多数の新しい発展は、多く共産党運動に義務があるということは事実である。人民戦線についてこれら最後の数年の歴史的生産の中に、それは、共産党運動の役割に捧げられた充実した研究ではない！結局、人民戦線に関するコミンテルンの及びそれらの支部の方向の決定について特別の考察は、分析の価値を高めることを可能にしなければならない。

第三インタナショナルの及び諸共産党の活動を特徴づけるため諸共産党の用語法は、歴史的な分析の中で取り戻されることはできる。しかし、利用された各用語に対して正確な意味を与えることは相応しい。例えば、戦略と戦術の基礎的知識の場合も同じことである。この領域において、人々は、一九三五年にコミンテルンの政策の継続性を主張する、そして単に戦術上の変化があるということを確認する、共産党指導者たちの明白な言説で満足することはできない。C・ナトリ Claudio Natoli は、彼の研究において、方法だった歴史的な分析の基盤について、疑いもなく第七回大会の結果を誇張した、解釈に反対して反発することを希望する、事実上変化は、一九三五年において、単に戦術上であったということの評価する。しかし、私は、私の論文でもっと前に評価を指摘するであろうので、用語法の不正確は、かかる評価を前進させるため私をハンディキャップらしく思われる。

従って、戦略上の方向の決定によって、私が理解する問題を明確にすることは有用であるように思われる。先ず第一に、戦略の用語は、共産党諸組織の活動と行動の様式と同様に、革命的行動の含目的性、その行動に到達するための手段、現存社会の批判そして他の社会の理想を定義する、分析と考え方の全体を指示する。そのように、戦略上の方向の決定は、

従つて単に考えの体系ばかりでなく、活動と実践の全体である。戦略上の方向の決定の修正の用語は、たとえ党の組織の考え方と革命の考え方は変わっていないでも、明白に目標の定義の中に、社会の分析の中にそして少なくとも暗に含まれた実践の中に導入された、変更を特徴づけるように可能にする。この用語は、幾つもの論文の中に批判された転換点の用語により好ましいように思われる。用語は、コミンテルンの及びそれらの支部の活動の中に行われた、変更の大きさと限界を分析するように可能にする。戦術の用語は、『階級対階級戦術』としてある方向の決定の結果を極く内輪に見積もるため、コミンテルンによってしばしば使用された。私の意見によれば、すなわち、諸勢力関係、活動家たちの精神状態、等で採用された、分析と実践を指定するため、用語の使用を留保することは相応しい。

補注。当時のフランス共産党は、その戦略と戦術、及び実践と理論との間に大きなギャップを持っていた。革命戦略は、ソヴィエト型社会主義革命戦略であった。戦術は、反ファシズム統一戦線―人民戦線戦術であった。フランス共産党指導部といえども、理論と実践の上ではこの政党レヴェルと民衆レヴェルを往復していた点等が、鋭く分析されなければならないであろう。それぞれの間をつなぐ架橋計画は、必ずしも十分に設計されてはいなかった。フランスの共産党指導部は、人民戦線運動の崩壊の要因について、何よりも国際的要因の重要性を考慮し、同時にとくに綱領の「休止」等に代表されるすべての国内的処置という国内的要因をも重視した。人民戦線が分裂始めると、彼らは再びボルシェヴィキ的テーマを追求し始めた。膨張した党勢力をバックに、各種細胞を中心としたソヴィエトの萌芽形態を創設することによって、労働者農民等の多数派工作に専念しようとしたこと等が、その顕著な例証であった。人民戦線組織網で、全国レヴェルや、精々県、地方レヴェルで、一応その形を整えたに過ぎなかった。大衆の基盤に密着した人民戦線委員組織は、例えばフランス共産党の下部組織に比べて、その数は絶対的に少なかった。しかも、パリを中心に、何れも中央偏重の組織地図を描いていた。フランス共産党は、結局のところ、当時依然として、その狭隘な社会的、階級的基盤からの黨員募集の政党というレヴェルに留まっていた。当時、政治生活において政党の果たす役割とその政党が構成する共同体の狭隘さの間の矛盾という、一九二〇世紀及び二〇世紀におけるフランス近、現代及び同時代政治史の持つ固有な矛盾は、フランス共産党の場合にも当てはめることができた。

国際的レヴェルにおいて人民戦線を分析するためモデルに、この際フランスのモデルに訴えることは、Rリヴィニエスによつて問題視される。しかし、訴えることの危険を指摘し、そしてユニークな全国的な現実の研究に要請することは不十分である。実際に、モデルの用語に考えることは、時代錯誤ではない。もしも人々は、フランスから従うべき模範を作り上げた、時代の言説に考えるならば、訴えることは余計である。モデルの用語に考察を批判すること、それは、時代の説明にひたすら従うように拒絶することである！それは、参照のモデルとともに隔たりと相違を測る、単純に割り切った *simple* 比較の分析を拒否することである。それは、同時に各々の全国的な経験の特別の統一を考察することである。Gニツェクリ Gabor Szekely がそれを証明するように、戦略上の周到な作成（念入りに作り上げること）において独創的な国際的な局面がある。最後に、三〇年代の共産党運動における国民的及び運動の弁証法は、一方で、他の時期に有効なモデルに自動的な訴えることを無効にする問題を、この時期に単に帰属する、歴史的に日付を書き入れた諸形態を装う。

共産党運動の人民戦線の動向の研究によつて今日提起された、色々な問題について現状を総括する *faire le point sur* ように試みながら、最後の二〇年間の結果及び前進を蓄積するように心配事を持つことは、全ては言われた、そして人民戦線の歴史は決定的に書かれるということを確認するに至らしめる義務がない。もしも人々は、人々がこの歴史を考察する展望を広げるならば、それは、実際異議を申し立てる評価である。そうすれば、もしも人々は、二〇世紀に社会運動の歴史の長い時間の上で、同じく世界的な尺度に、人民戦線の方向の決定の歴史主義者をよりよく捕らえることを希望するならば、新しい仮設は、議論すべきである。^(二)

第一のテーゼは、戦略上の修正（一九三四—一九三五年）である。

多数の論文、書物、シンポジウムは、これらの最後の年、三〇年代の初めにコミンテルンの歴史に捧げられた。論文等は、この号の論文の大部分は、参照される、決定的な認識をもたらした。同時に、諸事実を詳しく述べられた報告の中に、活動を再開するようにならなければならない、しかし、ずっと興味深い、認識の進歩自体によつて提起された解釈の諸問題を見

るように必要に思う。

私は、私の眼で、議論と新しい研究に種をまくように、四つの余地がある問題を同一視するであろう。すなわち、人民戦線の方向の決定を可能にする、コミンテルン内で周到な作成の過程及び決断、フランスの、フランス共産党の国民的諸決定因及び地位、継続性あるいはそして断絶はあるのか、何故戦略上の修正について話すのか。

私は、一九三二年春から一九三四年の初めまで進行する、少しも直線的でない発展の三つの特徴的な局面に再区分された、予備の時期を識別するであろう。

第一の局面、すなわち諸起源のあるいは第一の始まりの局面は、一九三二年から一九三三年の初めまで進行するであろう。第一の局面は、反戦と反ファシズム運動の着手によってマークされる。その運動の発展は、確かにナチズムの上昇の知覚によってマークされ、しかし同様にある数の革新、すなわち動員を広げるように余地がある、闘争の中間の諸目標の定義によってマークされる。特にフランスでは、フランス共産党は、選挙の容赦ない敗北の直後に、公の準備は、H「バルビュスの後援の下に行われる、アムステルダム大会の成功に積極的に専念する。J「プレゾー J「Peseau は、この運動に捧げられた彼の色々な研究の中に、彼は、下部組織で、実際に多様な政治的所属の加盟者たちを集めたということをよく証明した。(IRMシンポジウムでJ「プレゾーのコミュニケーション参照)しかしながら、第一二回大会は、現実^{プレゾ}にこの運動に結ばれた新しい実践を統合しないということを注目すべきである。一九三二―三三年の冬の間、反ファシズム連^{ラサンブルマン}合の方向に進む、多様な主導権は定着される。すなわち、主導権は、何よりも先ず全国的なレヴェル(フランス、チェコスロヴァキア)で拡がる、しかし、コミンテルンは、反ファシズム共同行動を提案する手紙によって、社会主義労働者インタナショナルに対して公に話し掛けるため、一九三三年一二三月を待つ必要がある。それは、二つの組織の間イデオロギイ的議論まで進む、フランス共産党からフランス社会党への提案によってフランスで表現される。(フランス共産党、段階と問題、フランス共産党と人民戦線について章、パリ、一九八一年)。

第二の局面は、一九三三年春から一九三四年三月まで、連合の主導権の批判の、そして分析の訂正の局面である。一般的にブルジョワジーの独裁の告発、社会ファシズムの批判及びある諸共産党における日和見主義的傾向の提訴は、第三回大会の時最高点に達する。それは、特に一九三三年春にフランス社会党の方向に、共産党の時機を失した主導権のため指定された、フランス共産党のケースである。しかし、これらのテーゼは、オーストリアでそしてフランスで、一九三四年二月の諸事件によって揺り動かされる。

第三の局面は、デイミトロフは、彼はコミンテルンの指導部を責任を引き受ける以降、その使者になる、分析の変化によって正当化された主導権の推進を理解する。それは、フランスの指導者たちは、一九三四年五月以降、社会党に共同行動の提案を送付するのを、マヌイルスキーと一緒に、フランスの指導者たちの側に執拗に求める、デイミトロフである。次いで、夏の間、デイミトロフの主導権に対して、少なくとも三つの本質的な点についてはっきりとコミンテルンの分析を変更する、諸資料は念入りに作り上げられる。すなわち、社会民主主義、統一戦線の構想及びコミンテルンの働き。これらの改革は、最初に一〇月に予定された第七回大会の報告に導く、議論を引き起こす。

人民戦線の方向の決定の周到な作成は、最近の日付まで、特にソヴィエト歴史家たちの書物の基礎について、事実上行われた。P = ポエフ P. Boer、M = ビカロンドの論文は、軍「ファシストたちの暴力的手段になさるべきで共有する、ブルガリアとスペインの共産党に関係する、内部の諸資料の中に人民戦線の用語の早熟な使用について貴重な指図をもたらす。しかしながら、これらの資料は、フランス共産党の主導権に関して、トリアッティの控え目な態度とともに、私を矛盾したように思えない。コミンテルンの態度はためらっている、それはスローガンのレヴェルにおいて表現されるように、実際私には思われる。疑いもなく、フランス共産党の政策は検討され、そして最後に承認される、一九三四年一二月の幹部会プレジヂウムの集会の時、一步は踏み越えられる。しかし、ガボル「ツェクリはそれを目立たせるように、新しいスローガンの周りに議論の眞の演壇ではなかった、それは、確かに討論はなかったということの意味しないということを注目する必要

がある。ルヴァイ Renaud のテキストは、これについて証言する。R ヴィニエスは、何時もコミンテルンの指導者たちの決定に認められた重要性を批判する。しかし、国際的な共産党組織の単なる製品、イクオール、人民戦線で道具主義化された考え方を先験的に有効にするところではない、これらの決定あるいは非決定の年表を目印を付けることは、むしろ人民戦線の方向の決定の周到な作成の諸条件の獨創性を明らかにさせる。

人民戦線の方向の決定の周到な作成において国民的な決定の部分は、多少とも広い仕方で見目されることはできる。人々は、例えば、第七回大会の時単に構成された方向の決定を念入りに作り上げるため、コミンテルンは、幾つかの国民的なケースを考慮に入れたことを評価することはできる。このアプローチは、M リビカロンド、P ポエフによってあるいはフランス共産党について私の研究によって指定された現実には照応しない。事実、一九三四年秋から一九三五年春まで、コミンテルンは、現実に新しい方向の決定を形式化される前ですら、違った全国的な背景の中で發展した、戦略上の周到な作成があつた。われわれは、先にコミンテルンにおいて不確実とためらいを言つた問題は、その当時配置される、新しい論理を理解することを許す。もしもコミンテルンは、一九三四年春以降、新しい方向について掛かり合いになつたならば、それは、先ず第一に消極的に、違つた目標に結び付いた新しい分析の首尾一貫した報告によって、よりもっと多くあるコミンテルンのテーゼの一時的なものとして考えられた放棄によつてである。コミンテルンの命令と勧告は、最後にとりわけ、同盟の問題^{アリゲンス}、選挙戦術の問題と関係する。新しい政治的実践と政治的体系とを諸階級とずつと区別された分析は、具体的な全国的な活動の場について發展する。

何らの論文は、人民戦線のある考え方の周到な作成において、フランスの特別な役割を異論を表明しない。R ヴィニエス自身は、彼は、フランスのケースの全て一般化に反対して用心するから、その役割を認める。正確であろう、このテキストにおいて、共産党運動の動向として人民戦線の方向の決定の周到な作成の過程を検討する問題であり、そんなことがすべての国における諸人民戦線の全歴史を検討する問題であるのか！ *et non...* それでもやはり、時代錯誤あるい

は過度の単純化 *simplicisme* に落ちないで、フランスのこの役割を理解する必要があるということは事実である。実際、フランス共産党は考え方を言い表わしたように、人民戦線の考え方は、多く第三インタナショナルの共産党文化に義務があり、人民戦線の考え方は、共産党文化に反対して作らない。この考え方は、他方では、強くフランスの政治的現実によってマークされる。この観点から、それは、先ず第一にモデルになるフランス共産党ではなくて、政治的体系を持つ資本主義強国としてフランス、イクオール、全国的及び国際的レヴェルにおいて、同時にファシズムに反対して及びソ連邦の防衛のため、同盟を可能にする、国家の形態である。一九三二年以来、コミンテルンのある主導権におけるフランスによって占領された地位は、この独創的な状況の表現である。それは、特に、大衆的性格は、とりわけフランスにおける鋭敏である、反戦及び反ファシズム闘争の運動のケースである。

これらの二つの資料に対して、フランスの労働者運動の政治史及びずっと特にフランス共産党の政治史を付け加える必要がある。私は、一九三四年一〇月に関して、G"ツェクリとともに着手された議論を続けるように、トリアッティ対トレーズの対決を再び話題にするであろう。実際、この日付にフランス共産党の改革的な及び先覚的な役割は、私を辛うじて異論の余地があるように思われる。パリにおけるトリアッティの旅行及び彼の調停は、政治的状況の二つの違った評価の間、当時現存する対照を私を明かすように思われる。一方では、コミンテルンの指導者たちは、統一戦線の伝統的なアジテーターの考え方を越えて進む、政治的主導権を前にして当惑したし、そして、何よりも先ず共産党の組織の同一性を保持するように心配している。他方では、共産党の若い歴史の部分と労働者運動のずっと長い部分と結び直し、統一戦線の伝統的な考え方を民衆運動に押し退けるに到らしめる、民衆運動の中に挿入される、フランスにおける、小さい共産党が存在する。

事実、フランス共産党は、はっきりと中産諸階級と急進黨員たちへ、当時右翼諸勢力とともに政府へ話し掛ける時、それは、大きな政治的改革を構成する。同盟の拡大は、ひどくその性格を変える。同盟は、共和的な政治的体系とその特別

な伝統の枠内で登録する。正確な歴史的時期に再び位置づけられた、この主導権は、危険なように思われることができた。その理由は、共産党の定員数と選挙の影響力は、社会黨員たちと急進黨員たちの黨員数等に比べれば、よく貧弱であったからである。人々は、共産黨員たちが、左翼の新連合ネオカールのため、単なる援助の力となることは、恐れることはできた。疑いもなく、トレーズは、彼は急進黨員たちに送付するように予定した演説を延ばすため、トリアッティの進め方は、イタリアの共産党指導者が、他の径路で防衛した考えに非常によく照応している。トリアッティの意見は、しかしながら、ずっと一般的な価値を持っている、トリアッティの意見は、その形態の中まで、コミンテルンの指導者たちの恐れと不決断を表現する。事実、フランス共産党は、コミンテルンの形式的な禁止、証拠として一八カ月前の諸事件に反対して進まなかったであろう。しかし、コミンテルンは、ある期待の中にあつた時から、フランス共産党は、活動の場について手に入れた成功は、トレーズの決定を補強した。一年以下の後に、トレーズは、コミンテルン第七回大会の背景において、『中央委員会は、人民戦線の考えを思い付いた、そして中央委員会は、一九三四年一〇月にその綱領を固定させた』時から、彼の呼び起こすことにあらゆる彼の価値を与える問題を、たまたまその決定を指示する義務があつた。(コミンテルン第七回大会、短縮した報告、モスクワ、一九三九年)。

一九三四年二月の幹部会の後でさえ、それは、フランスの全国的活動の場について、実は、人民戦線の方向の決定は、漸進的にそれらの特別なスローガンと一緒にイデオロギー的、理論的な方向の決定の形態を選び取る。疑いもなく、フランス共産党は、コミンテルンの幹部会と書記局と狭い連絡の中に留まる。幹部会と書記局の側に、フランスの指導者たちは、人民連合の設立の過程の真ん中に、そしてコミンテルン第七回大会の準備の最後の局面において、市町村議会議員選挙の直後に特に一九三五年五月に、何度も繰り返し返して、大きな路線と彼らの党の政策の結果を展示しようとする。他方では、人々は、フランス共産党は、一九三一年以来フランスに送られた、そして狭く指導部の職に結ばれたE「フリード」Friedのやうに、コミンテルンの代表者たちの存在と勧告の恩恵を浴することを知っている。それでもやはり、就中、第

七回大会の時、デイミトロフによって国際的方向の決定の形態の下で、取り戻される、そして一般化される前に、人民戦線の問題提起は、先ず第一にフランスにおいて構成されたというのは事実である。

補注。最近のフランス人民戦線やフランス共産党についての研究は、幾つかの新しい史実を提供し始めた。例えば、一九三四年一〇月下旬の段階で、P「トリアッティは、フランス人民戦線方式に極めて消極的であったという事実が、最近明らかにされた。P「トリアッティは、戦中及び戦後を通じて、祖国イタリアの社会解放構想を練る際に、フランス人民戦線の経験よりもスペイン人民戦線の経験を大きく取り入れたことは事実であったと考えてよいようである。M「トレーズは、一九五六年二月のソ連邦共産党第二〇回大会における「スターリン批判」以後、一九四九年に書いた自叙伝『人民の子』にかなりの補筆訂正を加えて、一九六〇年に新版『人民の子』として出版した。フランス人民戦線の形成についての次の叙述は、M「トレーズが新たに加筆した箇所の一つである。「ナント会議がひらかれる日の朝、わたしはある兄弟党の指導者を介して、人民戦線の方式と構想を放棄すべしという忠告をうけとった。わたしは数分後にナント行の汽車にのり、政治局がわたしに委託したとおりに人民戦線を組織することを急進社会党によびかける演説を、同地でおこなうであろうとこたえた。」一九六六年一〇月下旬、M「トレーズ研究所の会議の埒外で、同研究所副所長V「ミシヨールは、そこで次のように発言した。「しかし、ナントの前日まで、人民戦線という考えは、ジャックデュクロが述べたような留保条件にぶつかっていた。フランス共産党の偉大なイニシアティブは、当時パリにいたコミンテルンの代表、エルコリ(トリアッティ)同志の意見にかかわらず、M「リスストレーズからその最初の推進力を得た。」P「トリアッティは、一九三四年一〇月の段階で、フランス共産党の人民戦線構想の中に、右翼日和見主義の危険性を感じ取っていたと考えられる。政党レヴェルで言えば、同年七月二七日に締結された社共行動統一協定は、フランス社会党及びフランス共産党のそれぞれ独自の協定案をミックスするのではなく、フランス共産党がフランス社会党の案に大幅な譲歩を行うという形で実現されていた。ブルジョワ改良主義を指向する急進社会党が、人民戦線構想の射程距離の中に入れられた。P「トリアッティは、恐らくフランス社会党との統一戦線の形成とそれに伴うフランス共産党の大幅な譲歩までは、コミンテルン代表という資格で許容できたのであろう。しかし、P「トリアッティは、フランス共産党が急進社会党に手を差し延べてその主体性を希薄にし、急進社会党の政治路線にまで譲歩することを見透して、当時極めて消極的な意見しか持っていなかったと考えられる。事実、J「デュクロは、同年の報告の中で、次のような発言を行っている。「だが、急進党が人民戦線に加盟するように誘導するためにわれわれが展開した幾つかの努力は、コミンテルン指導部の承認を受けなかったように見えた。」P「トリアッティは、

恐らくコミンテルン第七回大会の報告の中でGディミトロフが述べた、社会民主主義にまつわる右翼日和見主義の危険性を、当時のフランスの情勢分析、すなわち急進社会党との人民戦線における右翼日和見主義の危険性の増大という視点から感じ取っていたのではなからうか。Pトリアッティの真意については不明であるが、人民戦線方式に対するスターリン主義の消極的見解の大きなかけりを看取ることも可能であろう。(トリアッティ批判、パオーロ・スプリアーノ Paolo Spriano 『コミンテルン書記トリアッティ』、初版一九八〇年、加筆された序文で再刊、レナート・ミエーリ Renato Mieli 『トリアッティ、一九三七年』、初版一九六四年、長文の序論で再版、ともに翻訳で未発表。ともにスターリン時代のコミンテルン指導者であったトリアッティの「共同責任」を問題にしている点で、共通した性格を持っている。) (『朝日新聞』一九八八年の書評から。)

第一のテーマは、継続性そしてあるいは断絶である。

どのように、共産党運動の歴史における人民戦線の方向の決定は挿入されるか。人々は、時折、継続性の支持者たちと断絶の支持者たちを対立させる討論に、この点について討論を境界を画定する傾向がある。もしも一五年があるならば、断絶と大転換点のテーゼは、勝利した、今日、それは、支配する、継続性のテーゼである。しかし、継続性のテーゼは、同時に、人民戦線の方向の決定は、コミンテルン第三回大会において一九二一年にレーニンによって防衛された考えに単なる回帰であるということを確認する、歴史家たちによって、そして二〇年代末にコミンテルンによって採択された基礎的方向の決定を元のままにする戦術上の変化は問題はあるということを考える、歴史家たちによって、主張される。

人々は、違ったやり方で問題を提起しなければならない。すなわち、フランスにおける念入りに作り上げられた人民戦線の方向の決定は、限られたしかし有効な戦術上の諸改革を含む。その方向の決定は、フランスにおいて偶然に出現しない、しかし、国際的レベルにおいて、方向の決定を準備するのに貢献した、政治的諸経験を延長する。私は、この点について、Gツェクリの論文に参照させる。私は、フランス共産党における、人民戦線の方向の決定の周到な作成及びその利用に有利な政治的文化的の定着について単に強調するであろう。

もしも人民戦線の直接的な起源でフランス共産党の役割は、非常にはつきりと現われるならば、人々は、同時に、他の諸共産党と違って、この党は、どのようにそして何故党の方向の決定を非常に大きく方向を変えることはできたかということを検討する義務がある。フランスの政治的体系の特別な特徴に加えて、同様にフランス共産党の前の歴史及び特にフランス共産党は、すでにフランス人たちの政治的諸条件に結ばれた特別な方向の決定を粗描した、時期を、それによって報告する必要がある。

なおレーニンの活動的な考察によってマークされた、コミンテルン第三回と第四回大会（一九二二—一九二三年）の、そしてディミトロフは、新しい方向の決定を結び付ける、これほど多くの時期が問題がない、しかし、むしろ一九二六—一九二七年の時期は問題である。例えば、フランスにおける次いで国際的共産党運動における人民戦線の方向の決定を具体化する、トレーズを取って見よう。（コミンテルン第七回大会について、政治史研究所のシンポジウム、プタベスト、一九八五年九月。S. ヴォリコフ、『フランス共産党、第七回大会、M. トレーズの役割、すなわち、伝記的なアプローチとコミンテルンの歴史。』）

トレーズは、世紀とともに生まれ（一九〇〇年の生まれ—筆者注）、人民戦線の時期に、なお若い人である、しかし彼は、すでに長い政治的経験を持つ。一九二五年に政治局に加わった、一九二六—二七年に急速に組織書記になった、彼は、続いて、一九三二年に指導者たちの間の最高の指導者になる前に、継続的に党の指導者たちの一指導者になった。第七回大会の前にして彼の参加における、トレーズは、彼は、当時セマールによって指導された、最初のファシストの圧力に向き合うため念入りに作り上げられた、フランス共産党の政策を引用する時、一九二六—一九二七年に、非常に正確に参照する。彼は、党は八年後利用する、政策の始まりとして参加を考える。すなわち、『われわれは、最初の連合、カルテルすなわち社会党によって支持された急進党諸政府の時期であった。ルール占領に反対して、そしてポアンカレ政府に反対してわれわれの党の勇敢なキャンペーンの後に、共産党の影響力は伸びていた。ブルジョワジーは、労働者階級に反対する闘いの別働隊の組織を出資した。この最初の企ては、一般的状況の理由で同様に党の激しい反撃の理由で、挫折した。共産党の最

も大きな活動は、ファシスト諸団体の活動に答えた。(Mittleres, コミンテルン第七回大会、引用書、一八七頁。)

事実、社会黨員たちを越えて進む、同時に協定を含む広い同盟を実現するように心配している、ファシストの諸企業と右翼の権力への復帰を告発するように心配させた、一九二六年にフランス共産党の政策は、党の影響力を仮に強化した、新しい方向の決定を表現した。しかし、コミンテルンは、間もなく日和見主義者として考えられたこの政策を批判した。フランス共産党の指導部とともに多数の討論の後に、党の路線を立て直すのに当てられた、『階級対階級』の方向の決定は、コミンテルンによって強く勧められたし、そして他の指導者たちの大部分に反対してトレーズによって防衛された。だからと言って、トレーズは、彼は、一時的に党の組織と黨員数を安定させながら非常に著しく具体化された、前の政策に恒久的に結び付けられた。(引用書論文、C、H、I、M、T、二五号、一九七八年。)

トレーズは、一九三一年に、フランス共産党の指導部の事実上の責任を取る時、トレーズは、フラシオンとともに、社会的諸要求について共産党の諸活動の軌道修正を奨励するし、バルビュスとラカモンによって活気づけられた、反戦と反ファシズムの大衆的運動の組織を支持する。一九三三年の初めに、コミンテルンは、四月一日、これらの働き掛けを中断するように要請する前に、フランス共産党の指導者たちは、社会党に対して交渉と議論の提案を提出する。

コミンテルンは、中間の諸目標に集中させた統一戦線の方向の決定と再び交わりを結んだ直ぐに、彼らの政治的文化、彼らの経験は、従って、フランスの共産党指導者たち、特にトレーズを、活動的なそして創造的な役割を演じるへの傾向を与えた。ソ連邦とボルシェヴィキ党によって勝ち取られた経済的成功は、これらの資本主義の危機の時代に共産党の考への強力な媒介者として出現したのに、彼らの慎重さは、一九三四年春に、国民的支部の指導的なグループに対して、コミンテルンの指導部は反対して正しいように許さなかった、コミンテルンの働きの良い知識の上に建てられた。しかし、新しい方向の決定は、フランス共産党の指導的グループに対して、彼らの能力を誇示するように許すようになった。フランス共産党の最初の成功は、一九三四年夏において、党の術策の幅と、人民戦線が代表する、改革において表現する、党

の決定を補強する。

第二のテーマは、戦略上の修正の用語である。

コミンテルン第七回大会の直前に、フランス共産党の政治的活動は、根底から変えられる。もしも、戦略上の修正の用語は、この変化を特徴づけるために有用であるように思えるならば、それは、用語は、戦術上の方向転換の概念あるいは表面的に転換点の叙述的な用語に結合された誇張に伴う、過小評価を避けるということである。フランス共産党の分析と政治的諸活動における諸変化は、諸変化は、社会諸階級、国家、国民、政治それ自体の表現を装う程度において重要である。党の活動の分野は、その分野は、それは、これらの最後の年、マルクス主義研究所に通じていた多様な研究において示されたように、政治的民主主義に結び付ける重大さからして当然、幅を広げそして再び定義される。そのように、フランス共産党の活動は、明らかにフランスの全国的現実の中に挿入される。しかし、何故なら革命的合目的性の考え方は元のままであるから、人々は、全体的な戦略上の変化を結論することはできない。すなわち、革命的展望は、消しゴムで消されないで、時期において押し退けられ、当時の政治的状況の分析に元のまままで並べられる。フランスソヴェト共和国は、国際的に確立された一般的モデルについて思い付かれる。特に、一九三五年一月に、フランス共産党は、フランス社会党との論争の枠内で資本主義的制度に国有化を作り上げる批判は、この論題に明かす。（M¹マルゲラーズ、『改良主義的労働者運動と国家』、C、H、I、R、M、一一号、一九八二年。）たとえ実践においてそこで進歩があるにしても、革命的党の役割、党の組織と党の働きへの考え方は、その前と同様な様式によつて考察される。しかしながら全体として、変更は、変更が、完全に戦略をひっくり返さないで、フランス共産党の戦略を装うようなものである。この部分的な変化は、同時に変化の過程として、そして同時に、革命的戦略は、二〇年代／三〇年代の転換点に形式化されたように、革命的戦略の一貫性の喪失の過程として読まれることはできる。この意味で、この修正は、矛盾であった、コミンテルン第七回大会の諸研究及び諸研究の解釈は、修正を証明しようとしていた。^(三)

第二のテーゼは、国際化と国際化の諸矛盾である。

多数の研究は、第七回大会に捧げられたこれらの晩年であった、その上一九八五年は、今後十分によく知られた主題について幾つかのシンポジウムを開催されることを見た。(コミンテルン第七回大会についてモスクワ(マルクスレーニン主義研究所 IML)のシンポジウム、一九八五年七月及びすでに引用されたブダペストのシンポジウム。この大会について書物のため、A. アゴステイの書誌、C. H. I. R. M.、二号、一九八〇年参照。) 人民戦線の方向の決定は、ファシズムの攻勢についてデIMITロフによつて提出された報告において、説明される。ブルガリア指導者は、ファシズムの独創的な特色を特徴づけた後、諸共産党は、使用しなければならぬであろう、新しい方向の決定の大きな路線を強調する。ファシズムによつて脅かされた民主主義の防衛、諸階級と民衆的諸党の間の大きな同盟の政策及び国民的感情を考慮に入れること *la prise en compte* は、デIMITロフが主張する、主要な諸点である。この進め方の現実主義を証明するように、ブルガリア指導者は、例えば会議の参加者たちにフランス共産党をもたらず。あるやり方でもつて、ブルガリア指導者は、今後長くドイツ共産党によつて保持された地位を占めた。フランスのケースを一般化しながら、デIMITロフは、戦略上の修正を除けば、当時まで留まったある諸共産党を説得しようと気を遣う。しかし、それは、新しい方向の決定の提出自体について実は結果である。その提出は、階級対階級という方向の決定と矛盾していない、そしていずれにせよ、レーニンの考えに対して復帰は問題であるということ、デIMITロフは、証明するように努力する。一方では、労働者階級の役割、諸要求のための闘争と反ファシズム闘争の間の連絡のようなフランスの特徴は、引き立っている。他の一方では、反対して、余りに専らフランスのある側面は、消しゴムで消される。そのように、共産党員たちの起こり得る政府の参加によつて提起された問題、あるいはなお人民戦線の連合の政治的勝利によつて開かれた展望は、非常に簡潔に話し掛けられる。フランスの共産党員たち、特にトレーズは、ずっと長く、これらの問題についてよく介入する。トレーズは、他方では、一〇日以上続く議論において、詳細なそして区別された方法で、フランス共産党の政策を説明するように専念する。人々は、しばしば反ファシ

ズム統一戦線の用語によって取り替えられた、人民戦線に作ったもしくは作られなかつた参照によって特に表現する。態度の相違を、大会の間に、識別することはできる。その上、ピークの活動の報告とデイミトロフの活動の報告の間に、語調の相違よりもっと多く存在するということは、周知のことである。それは、問題である、進め方の相違である。もしも他方ではアクセントは、国民的諸問題の重要性について置かれるならば、国民的問題は、しかしながら、全てのその問題の大きさにおいて、そして徹底的に植民地諸国に関して、取り扱われぬ。しかし、デイミトロフの報告、彼は引き起こす豊富な議論、国民的諸支部に対して最大の自治を与える規定の変更は、単に当時人民戦線の方向の決定を発見する、多数の共産党の側に、第七回大会のインパクトを説明する。すでにこの方向に積極的に関与した、別の諸共産党に対して、大会は、前の諸共産党の活動の正統化として、ますます主導権を取るように諸共産党の傾向を補強する問題、彼らの色々な国民的支部について、大会の決定のインパクトを抑制するようにコミンテルンの心配事と矛盾して間もなく入る問題である。

第一のテーマは、第七回大会の解釈における制動装置である。

第七回大会に続いて起こる、数週間と数カ月において、コミンテルンの方向の決定は、研究を高揚させるのもっともコミンテルンの研究の革新的な結果を極く内輪に見積もるようになげられる。マヌイルスキーは、彼はレニングラードとモスクワの活動家たちの前に描く、総括において、彼は、コミンテルンの新しい戦術を呼ぶ問題の本質として考えられた、統一戦線についてアクセントを強調する。一九三五年秋に、人々は、Gリップロカチ G. Poccaci の研究は、それを公表したように、エチオピア戦争の機会に、コミンテルンと社会主義労働者インタナショナルの間、緊張の激化に目撃する。（Gリップロカチ、社会主義インタナショナルとエチオピア戦争。ローマ、一九七八年。）レイブゾンとシリニーヤは、それは、特にチエコスロヴァキア共産党とフランス共産党のケースであるように、諸共産党の日和見主義的傾向のため、コミンテルンの幹部会によって批判された、ある諸共産党の主導権の制動装置に対する傾向を等しく強調する。（レイブゾンとシリニーヤ。第

七回大会（ロシア語で）。モスクワ、一九二一年。）しかし、それは、フランスで人民戦線政府に対して共産党の参加の問題について、実は、この態度は、明確な形を採る。

第二のテーマは、政府の問題、フランス共産党及びコミンテルンである。

人々は、時折信じる問題とは反対に、政府の問題は、一九三五年以降非常に具体的にフランス共産党によって話し掛けられる。今年の中に、党の態度は、重要なやり方で発展し、それは、当時疑いもなく、コミンテルンと関連して、実は、一九三六年で防衛された態度は、結局一九三五年秋以降採られたということである。今年六月に、共産党の議員たちは、議員たちの弱い数にもかかわらず、『現実に急進党政策を適用するだろう、急進党政府を支持する』ように提案した。（一九三五年六月で共産党員たちの議会提案について、フランス共産党、段階と問題、引用書を参照。）これらの提案は、何故ならラヴァールは、当時急進党員たちを含む右翼の政府を組織するから、議会レヴェルにおいて直接的結果なしで、社会党たちと急進党員たちを、七月一四日の目標にして人民連合に結果するように余儀なくさせる、新しい政治的状況を創り出すように貢献する。コミンテルン第七回大会は、人民戦線の方向の決定を支持する。しかし、ある歴史家たちの断言とは反対に（例えば、J. J. ベッケェル J. J. Becker、フランス共産党は権力を奪うことを望むか、パリ、一九八一年参照）、第七回大会は、共産党員たちの政府の参加の問題について明確に意見を述べない。ディミトロフは、大会の前に、当時フランス以外の他の場所で具体的に提起されねばならないように思えない、そしてコミンテルンの文化において鋭敏な点である、この問題を取り組む。ディミトロフは、革命的性格を状況に付与するであろう、そして共産党員たちの政府の参加を考察するように許すであろう、一般的諸条件を表明する。しかし、彼は、あらかじめ、採択すべき態度を決定するため、作り方がない、そして、全ては、具体的な状況によって決定されるであろうということをも、同時に説明する。研究の末に、彼は、人民戦線政府への参加を、彼は、権力の革命的奪取に行き付くであろう、確信に服従されることは間違いないであろうことを譲歩して認める。ミットレーズは、ずっとはっきりしている、そして、曖昧さはなくて、反ファシズム闘争の枠内で人民戦線政

府の形式を位置づける。すなわち、『大衆の運動の圧力は、わが党は支持するであろう、そしてわが党は、そうなった場合、参加することさえできるであろう、人民戦線政府の必要性を押し付けることはできる。』（フランス共産党と人民戦線政府への参加の問題）、C、H、I、M、T、三四号、一九八〇年。）

続いて起こる数カ月において、フランス共産党の指導者たちは、活動家たちに問題の全重要性を説明しながら、彼らの参加の構想の定義がはかどる。その理由は、トレーズは、強調する、『統一戦線の、あるいは人民戦線の発展とともに、これは、活動されることである。この主題に対して明確な考えを持っていることは相応しい。』（トレーズ、パリ地方の共産党員たちの会議での報告、著作、九分冊、一四五頁。）急進党員たちは、ラヴァールを批判し、選挙綱領について議論に参加するのに、政府の展望は、具体化される。共産党員たちは、彼らが、議会の組み合わせに基礎を置くであろう、政府に入閣することに同意しないことを強調する。その理由は、人民戦線政府、『それは、広い大衆の運動に基づくであろう、政府であろう。』（同書。）共産党員たちは、スカンディナヴィアあるいはベルギーの社会民主主義諸政府を模倣する必要がないということとそれをと同様に思い起こす。だからと言って、展望は、遠い将来において拒絶されないで、反対に具体的に想い起こさせる。すなわち、『その時、党は、すべての党の力を投げるであろう、党は、人民戦線政府に対して、場合によつて党の人間たちを含めて、すべての党の手段を与えるであろう。』（トレーズ、一〇月一七日中央委員会、著作、一〇分冊、四一頁。）中央委員会は、共産党員たちとともに政府の形成のため、好都合な時期があるだろう問題を明確にする、党の指導部の報告を理解する。すなわち、『労働者階級は、ブルジョワジーに反対して最後の襲撃するなお用意ができていない時、労働者階級は、ソヴィエトへの権力とプロレタリアート独裁のスローガンの下に、闘争になお用意ができていない時、しかし、労働者階級、人民の深い諸階層は、ファシストの企てによって反対することに決定される時、すなわち従つて、真の革命的状況は、生活において、言葉においてではなく、創造される時。』（同書。）反ファシズム闘争、諸自由の防衛及び民主主義に対する闘争は、そうすれば、革命的性格を装うことはできなし、コミンテルン第七回大会の決定に従つ

て、この背景において形作られる政府において、共産党員たちの存在を許可することはできた。トレーズは、『リュ、マ、ニテ』紙は、大きな反響を作る、ミュテユアリテ会館で演説において、それを言う。すなわち、『ファシスト一味の攻撃の前で、われわれの綱領を何も否認しないで、われわれは、人民戦線政府においてわれわれの責任を取る用意ができていゝ。』(『リュ、マ、ニテ』紙、一九三六年一〇月一八日。)

一九三六年春の状況を非常にはっきりと予想する、これらの宣言を読めば、人々は、辛うじて当時防衛された不参加の態度を理解する。さて、不参加の態度は、はっきりと選挙のキャンペーンを通じて知らせたし、一九三六年一月に党の大会の時、述べられたことを、われわれは理解する。決定は、従って、一〇月末と一二月の間に、効果を發揮されたし、そして国政選挙の直後に効果を發揮されなかった。コミンテルン幹部会の集会の時、フランス共産党は、フィンランド指導者クーシネンの言葉に対して、党の『人民戦線政府の問題を提起するように仕方』によって、『抽象的な図式主義』において倒れるために批判される。(『コミンテルン』誌、一九三六年一月。) トリアアッティは、パリに居住するイタリア人たちと彼の通信において、同じ批判を取り戻し、トレーズの話題は、コミンテルン書記局に討議されたということを指摘する。(トリアアッティ、G. ドツァ G. Dozza への手紙、一九三五年一月一七日、全集、四分冊。) 参加についてフランス共産党の態度は、恒久的に、一二月以降変えられる。人民戦線政府の新しい定義は、『労働者農民政府への、プロレタリアート独裁とソヴィエト共和国の政府への序文として』与えられる。(トレーズ、一九三五年二月二六日の演説、著作、一〇分冊、一六一頁。) 人民戦線政府のこのような構想、今後遠い展望は、差し当たり、すべての共産党の政府の参加を単に評判を悪くさせることはできた。ヴィユールバンヌで正統された及び發展された、この態度は、選挙キャンペーンを通じて、『リュ、マ、ニテ』紙の欄の中で、J. リヂェクロによって確認される。すなわち、『参加、それは、正確に、国政選挙の直後に、すなわち、議会の多数派と政府の行動を承認し、圧力を加えるため、大衆の動員が必要であろう問題の反対のことである。』(明日の政府、『リュ、マ、ニテ』紙、一九三六年四月二三日。) 五月六日、記者会見において、M. トレーズは、フランス共産党の態度を待

つことはなく指摘する。すなわち、『われわれは、政府に参加しないであろう、すなわち、われわれは、われわれの選挙キャンペーンの間に非常に誠実に政府を言ったし、繰り返した。』（M「トリーズ、著作、九分冊。）彼らの態度を説明する、フランスの共産党指導者たちの素早さは、彼らは、コミンテルンの決定を待たなかったということをよく指示する。事実、幾つかの月以降、明確な態度を要点を絞るため、何の事前の集会はなかった。不参加は、フランス共産党が、少数派である、党は畏にはめられるだろう、政府の経験の中で引きずられるべきでないことを評価する、コミンテルンの書記局の同意を集める。だからと言って、デIMITロフは、フランス共産党が、新しい政府に関して、積極的な態度を持たねばならないということに当時よく意識している。彼によれば、不参加は、原則と仮定されるべきではないが、例えば、人民連合の統一を脅かす右翼の反動を引き起こすように避けること、イクオール、一時的な議論によって正統化されねばならない。』（『フランス共産党の活動と実践における変更、結果及び限界』という私のコミュニケーション、一九八六年九月七八日、人民戦線とフランス人たちの日常生活のシンポジウム、参照。）フランス共産党は、党の最初の宣言を想起するように満足しない。トリーズは、状況の新鮮さを力説する、そして彼らの『責任の精神』を強調しながら、共産党員たちの不参加を相対化する。『われわれは、人民戦線の全諸党によって採択された、綱領の実行に移すこと *mise en pratique* の仕事の中に社会参加として、われわれの責任を考えると、われわれは、あなたに非常にはつきりと言う。』（この同じ号でマルタ・ピカロンドの論文参照。）事実、フランス共産党は、当時、諸要求は、適えられる時から、党は、ストを止めるように要請する時、特に六月一日、表現される、政府の党の態度を採択する。この責任がある態度は、冒険主義と孤立を避けながら、人民戦線を保持し、かつ強化するように心配事を表現する。しかし、この状況において、政府の不参加は、共産党員たちに対して、諸勢力関係を強化するように認めない。社会党は、実際に、彼の政府の責任は、今後社会党を結合する、社会的諸措置の人気で恩恵を浴する。J「デュクロは、明確にする。すなわち、九月以降、彼は、スペインの共産党員たちに対して、コミンテルンの名において、フランスの経験に基づきながら、政府へ参加するように勧告を与える。（この号にC「ナトリの論

文及び I R M シンポジウムで彼のコミュニケーション参照。))

補注。フランス共産党政治局(九名)は、レオンブルム政府を「真の人民戦線政府」ではないと判断して、黨員を閣内に送り込まない決定を行った。フランス共産党は、レオンブルムの再三再四にわたる入閣要請に対して、拒否の態度を取り続けた。しかし、一九三六年五月、六月と人民戦線運動が異常な昂揚を示し始めてくると、レオンブルム人民戦線政府への参加問題を巡って、Mittレーズと彼以外の政治局メンバーとの間に微妙な意見の齟齬が生まれ始めた。Mittレーズは、レオンブルムによる政府への参加申し込みを承諾する考えの方に傾き始めた。Mittレーズは、一九六〇年に再版した自叙伝『人民の子』の中で、次の箇所を新たに加筆した。「政府の問題が提起されていた。人民戦線の勝利と、選挙でのわれわれ自身の成功とに反映されていた大衆の圧力を目の前に見て、わたしは、わが党が大胆さを発揮し、単に議会支持の政策に留まらずに、将来のブルム内閣にわが党の人間を送り込むという考えを発表した。ところが政治局はこれとは違う意見を持っていた。Mittレーズは、個人的にレオンブルム政府へのフランス共産党の参加という考え方を主張し始めた。その他の政治局メンバーは全員が、Mittレーズの考え方に反対であった。政治局で何時この問題が審議されたかということ、不明のままである。Jデュクロは、政治局レヴェルでは、この問題について全然討論が行われなかったことを明らかにしている。政治局内では、この種の問題は、コミンテルン第七回大会の決定以降、いわば一刀両断に解決済みの問題であると考えられていた。(Jデュクロ、Cヴィラルのインタヴュー、及びJデュクロ、一九六六年一〇月下旬、モリスストレーズ研究所の報告の中で、入閣問題の経緯について、『モリスストレーズ研究所歴史雑誌』、二二号、一九六六年、及び同書、三三四号、一九六六年七月)。スペインでの貴重な経験は、フランスの政治にも微妙な反映をもたらした。一九三七年春と、一九三八年の一月に第二次レオンブルム人民戦線政府が形成されようとしていた時に、フランス共産党指導部は、コミンテルン中央の勧告に基づいて、連立政権に参加する用意があることをはっきりと意思表示した。(急進社会党は、共産党入閣に対して拒否の態度を明らかにする。)フランス共産党は、国内レヴェルでは一九三六年六月からの社会的爆発が、国際レヴェルではスペイン内乱の勃発が、Gディミトロフがコミンテルン第七回大会で述べた政治的危機という条件を完全に明るみに出したために、政府参加の意思を表明した。フランス共産党は、この二つの大きな事件が、左翼政府、人民戦線政府と真の人民戦線政府との間の深い溝を埋めたものと評価した。しかし、フランス共産党は、反ファシズム政策と、その独自の戦略思想ソヴィエト革命を指向した上での党独自の強化という、二つのプランを混同しないように留意していた。フランス共産党の行動様式は、極めて経験的、実践的であった。理論的な説明は、党機関内では、極めて稀にしか

行われなかった。しかも、Mittレーズの発言には常に、伝統的なソヴィエト・ボルシェヴィキのテーゼの伏在が発見された。フランス共産党の左翼政府支持政策は、人民戦線政府への参加問題をも含めて、一九一七年段階のロシアにおけるレーニンによる二重権力構想のフランス版として考えられていた。フランス共産党による最初のレオン・ブルム政府への不参加は、短期間での権力獲得の展望に位置づけられる政策と結びついていた。人民戦線委員会は、やがてソヴィエト同族体のものに発展するものとして考えられていた。一九三六年の終わり頃から、フランス共産党は、レオン・ブルム政府の外部にいただけでなく、国民議会レヴェルでもこの政府を支持する左翼多数派の外部に身を置き始めた。フランス共産党は、労働者及び社会主義的世論のレヴェルでは、左翼多数派の内部で新たな多数派を獲得するために、そのあらゆる努力を展開した。フランス共産党が描き続けた、共産党の指揮する真の人民戦線政府こそ、当時におけるプロレタリア革命Ⅱソヴィエト型革命への移行と接近の真のフランス的形態と考えられていた。一九三七年七月以降、内外情勢の急展開に伴って、レオン・ブルム人民戦線政府への参加の意思を表明してからも、フランス共産党指導部は、それを党独自の戦略に基づく戦術的コララーリとして評価した。彼らは、ブルジョワ社会の頭部に座を据えて、階級レヴェルや大衆レヴェルに対して、人民連合綱領を実現し、ひいてはフランスソヴィエト綱領を宣伝する効果的な圧力活動を行おうと企図した。彼らは、レオン・ブルム政府への参加を、あくまで真の人民戦線政府Ⅱ大衆の内閣、ひいてはソヴィエト政府実現の挺子として利用しようと画策した。彼らは、政府参加の実績を媒介として、左翼多数派内の真の多数派となり、ひいてはソヴィエト信奉者の少数派を多数派に転化させるための努力を行おうとした。(フランス共産党は、一九三二年から一九三六年までに、その選挙得票数を約二倍にし、国民議会議員数を約七倍にし、そして党員数は、数十倍に増大するという発展を示した。新しい労働総同盟が結成された当時、約一〇〇万を数えた労働組合員たちは、その後たちまちの中にその数を約五〇〇万(一九三〇年で労働者総数約一、三〇〇万)にまで増大した。しかし、一九三六年五月、共産党の党員数約一三万一、〇〇〇が、社会党の党員数約一二万七、〇〇〇をわずかに凌駕した時点から、両政党のフランス社会主義労働者運動に占める地位とその役割に微妙な変化が生まれ、それ以後フランス共産党の地位と役割が、社会主義労働者運動の領域において主導的となっていく。この短期間の展望は、Mittレーズの一時期の楽観論に取り入れられた。) フランス共産党は、かなりの動揺と逡巡を重ねながら、プロレタリア革命とフランス社会主義の伝統や理想とを結合しようとして試みていた。しかし、フランス共産党は、新ジャコバン主義の理論を、ついに誕生させることができなかった。³⁾

結局、トレーズは、彼のやり方で、それを想い起こしたように、政府の参加は、共産党員たちは推進した、方向の決定

と民衆運動の方向性において可能であったであろう。もしも、この機会で、一九三四年で、人民戦線のスローガンに反対してすでに前進した議論に類似した、コミンテルンの議論は、今度、フランス共産党によって筋を追われたならば、それは、疑いもなく、党自身はためらいがあったからであり、党は、疑いもなく同様に、一九三六年春に表現されるべきであった、民衆運動の力を過小評価したからである。この意味で、決定の責任をコミンテルンについて拒否することは正当ではない。いずれにせよ、トレーズは、フランスの状況の注意深い分析の土台について、方向の決定を表現したように、彼の介入は、最も勇敢なそして最も革新的な方向の決定を当時支持しなかった事実である。

結局、あらゆる諸共産党に対して人民戦線の方向の決定のコミンテルンによって一般化は、フランス共産党に対して、党は取り扱わねばならなかった政治的諸問題は、辛うじて、新しい方向の決定に巻き込まれた諸党の大部分は、解決すべきであった、政治的諸問題よりも複雑であった程度において、刺激物よりもっと強制であったように思われる。その上、フランスの政治的状况の発展と同様に、党の活動は、今後ソ連邦と同盟したフランスの国際的影響力を安定させるように、心配そうな外交の気懸かりを考慮して評価された。その他に関しては、人々は、人民戦線の方向の決定において、ソ連邦共産党の約束の欠如を無視することはできない。すなわち、スターリンは、公に彼の主題について自分の考えを表わさない、しかし、一時期に、スペインとフランスのようなある国々において、その果実を付ける、政策を作るままにさせて置く。

結局のところ、一九三五―一九三六年の冬において、人民戦線の方向の決定の解釈は、それ自体として、中心問題である。私の意味で、人民戦線の政策は、諸党の実践は、新しい状況によって混乱させる、ある国民的ケースにおいて戦略上の方向の決定として働く。もしケースは、直接にそれにある責任があるいは責任がないならば、ケースは、人民戦線の展望においてケースの党の政策を登録する。しかし、コミンテルンの及びある諸支部の指導者たちの一部分は、単に共産党の活動の戦術上の変更は問題であるということを考える。人民戦線に対する明白な参照は、当時乏しくなり、統一戦線に

同化された人民戦線の単なる反ファシズムの局面を力説するような傾向は、よく起こる。就中、たとえコミンテルンの介入は、一九三六年春までとにかく最も最高で主導権を平均化することに貢献することは真実であるとしても、戦術上の変更の用語は、当時多数の諸共産党の中に行われた、現実の変化を報告するのに足りるということ、私は信じない。

介入の新しい様式は、共産党諸活動の全体について、そして全国的政治的体系の中に諸共産党の挿入について効果がある。特にフランスのケースにおいて、従って十分に大きなそして首尾一貫した性格を持っている変更は、新しい戦略上の方向の決定の生存を確認する。戦略上の方向の決定は、共産党文化のすべての成文をひっくり返さないで、しかしながら、ある人々の変更及び全部の再組織を引き起こす。（前掲、一九八六年九月七・八日参照）^(四)

第三のテーマは、第二の衝動（一九三六—一九三七年）である。

一九三五年と一九三六年の転換点に対して、非常に異なった諸条件において、諸共産党の政策を上げながら、人民戦線の同じ方向の決定を引き合いに出した、疑いもなく、すでに諸共産党の活動の現実的な多様性があった。当時、スペイン共産党の活動とフランス共産党の活動を分ける、すべての問題を比べるのが一番である。（この同一の号の中でマルタビカロンドの論文参照。）しかし、一九三五年秋に、あらゆる支部の方向の決定を統一するため、コミンテルンの努力は、この多様性を包み隠す傾向があった。

一九三六年夏から、幾つかの要因は、多様性を出現させる。すなわち、全国的状況の分化は、ある国々において、諸共産党は、実際にスペインにあるいはフランスにいるように、政治的諸成功を勝ち取る人民戦線運動において挿入されると直ぐに、増大する。しかし、他の国々において、状況はまったく異なっている。すなわち、諸共産党は、状況に孤立されるように続ける、そして社会党の動向によって支配された、労働者運動は、分裂したままである。他方では、国際的緊張の発展とともに、人々は、ソヴィエト外交の最も大きな役割を目標とする。同時に、一九三六年夏の間、平和のため国際的運動の推進を考慮して、コミンテルンによって推進された主導権は、インパクトは、G「ツェクリによって強調される、

ブリュッセル大会とともに、成果を知っていた。最後に、人々は、コミンテルンの指導機関の統一する役割のある弱点を注目することはできない。今後、諸党の代表者たちを集める、議決権を有する決定機関の集会はもはや存在しない。ディミトロフの衝撃の下に、幹部会と書記局は、多様な諸共産党に対して、異なった援助に彼らの活動を集中させ、一時期に、誰でも一般的なそとして拘束するテーゼを念入りに作り上げるのを止める。

スペインとフランスの諸人民戦線の二つの政治的勝利、中日紛争の重大化は、不十分なものとして、第七回大会の分析及び後の制限する分析の解釈を出現させる。

それは、この背景の中で、実は、共産党運動において考察と戦略上の諸改革の推進を位置づけることは必要である。この第二の局面は、その結果は、一九三四—三五年の時期の結果を越える、前進によってマークされる。その上、この局面は、今後、具体的な全国的諸経験において定着する、戦略上の考察の際立った地方分権によってマークされる。この点について、C「ナトリは、説得力のあるやり方で、スペインの状況の進展から、ディミトロフとトリアッティの考察の重要性を強調する。(前掲、C「ナトリの論文参照。)最初の人、ディミトロフは、スペインで、闘争は民主主義共和国のために巻き込まれるということを強調しながら、人民民主主義として民主主義共和国を特徴づける。(S「ヴオリコフ、『コミンテルンと国家』、C、H、I、R、M、一九八二年、一一号。)ディミトロフは、ブルジョワ民主主義国家の問題は、今後、異なったやり方で提起されるということを説明する時、ディミトロフは、はっきりと進め方の新しさを要求する。彼は、等しく更新された様式で、革命的移り変わりの問題を取り組む。その理由は、たとえ、資本主義的体系は、生存し続けることでも、彼は、人民民主主義の時期を、人民戦線は、決定的な影響力を持っている時期として考える。トリアッティは、特に、民衆諸勢力の勝利後、それに新しい型の共和国を作るであろう、未来のスペイン共和国の特別な諸特徴を活用する。疑いもなく、ラルゴ・ババレロに対してソヴィエト指導者たちの手紙は、戦術上の動機を免除されていなかった、そして手紙は、中心問題は、国際的であった戦争の枠内で位置づけられた、しかしいずれにせよ、手紙は、スペイン革命の独創性と、その発

展に貢献するため、議会の道の可能性を承認したことは事実である。（コム、シテルン、史（I M L）、モスクワ、一九六九年参照。）革命的移り変わりと革命それ自体の諸問題は、従って直接に、取り組まれた。それは、国民的独自性を考慮に入れることに基礎を置いた、人民戦線の最初の方向の決定の延長において、諸階級闘争の優れて活動の場として政治的民主主義を、民主主義の拡大の運動として社会的諸関係の変化を含まれた。一部分は、スペインの諸事件によって引き起されたこれらの考察は、フランス共産党の活動自体における現実的な政治的インパクトは、試験を必要とする、予想であった。（IRMのシンポジウムに対してマルタリビカロンドのコミュニケーション参照。）

中国において、共産党員たちは、同時に日本人たちに反対して愛国的な闘争において集まるように、そして、道は最初の段階を構成するであろう、民主主義革命の道を開くように余地のある目標として考えられた、民主主義共和国のスローガンを発する。それは、『血は流されることはなく』革命的発展の可能性を開くであろう。

フランスにおいて、等しく考察の新しい推進である、しかし異なった帳簿についてその推進である。選挙の勝利とストの決定の深化は問題である。人民戦線の政治的、選挙的及び社会的勝利は、フランス共産党は、主要な立役者及び状況によって提供された新しい可能性があった、方向の決定の弱点を出現させる。フランス共産党は、党の同盟政策の深化において社会参加する。フランス人民の団結のスローガンは、スペインで戦争の勃発の直後に、フランスで、内戦に有利な状況の創設を避けるため、人民戦線の政治的基盤を広げることは問題である、フランス人戦線のスローガンにおいてその表現を発見する。（引用、フランス共産党、段階と問題、同時に次の雑誌の号に現われるべき、三〇年代におけるフランス共産党の活動について論文参照。）フランス人民の団結のスローガンは、他方で、その宣伝の仕事において大きな有効性を取得させ、その知的な環境において影響力は、進歩する、広い及び多様化された編集の及びジャーナリストイックな活動を発展させる。しかし、それは、経済的諸問題の及び国家の周りに、実は、その考察は、進展する。そのスローガンは、彼は一九三八年

に政府の綱領の最高の作品として登録する、一九三七年から、一連の理論的な考察及び経済的な民主化の一連の提案、イクトール、国有化を念入りで作り上げる。(S^トヴォリコフ、『書物の中に、フランス共産党の独自性』、暗い年代のフランス共産党、一九三八—一九四一年、スイユ、一九八六年。)

しかしながら、フランス共産党の方向の決定は、二つの限界によってマークされたままである。その理由は、一九三六年秋にトレーズの幾つかの軽い気持にもかかわらず(M^トトレーズ、『共産党員たちは望む問題』、著作、一三分冊)、フランスで社会主義と革命について新しい考察は存在しない。教育的なテキスト及び指導部の大きな演説において、アルル大会(一九三八年一月)とジャンヌヴィリエ協議会(一九三九年一月)の時、フランスで社会主義の問題は、常に大雑把なやり方で、ソヴィエト革命に準拠して論ぜられる。(例えば、アルルで第九回大会(一九三八年一月)で、ジャンヌヴィリエの全国協議会(一九三九年一月)で、フランス共産党の書記長によって提出された報告参照。)フランスに対して実例としてソ連邦で現存する社会主義の言及は、首尾一貫したやり方で、人民戦線についてフランス共産党の考察とも、決して一語一語区切ってはつきり発音されない。事実、社会主義の理論的な構想は、フランス大革命の一五〇周年記念日の祝賀で同時に、一九三九年春に、共産党(ボルシェヴィキ)史、ハンドブックの普及に、フランス共産党によって作られた反響がそれによって証言するように、ボルシェヴィキ党の問題を残っている。

第二に、フランスの中で政策について同様に、党の組織と活動の諸問題について、実際のな考察にもかかわらず、大衆的党の及び政治化の諸形態の新しい構想が存在しない。この点について、理論的な参照は、スターリンの諸文書によって供給された参照である。実際に、フランス共産党の非常に豊かな実行は、対応する理論化の原因とならなかった。しかし、闘士的活動の進展、新しい活動の発展は、その種をまいた。この欠如は、ハンドブックの中に、党の問題に対して、スターリンによって捧げられた、報告は、それを証明するように、コミンテルンとソ連邦共産党において、確かに控え目に結ばれている。その上、人々は、どのように、フランスの政治的情勢の急速な逆転は、一九三九年以降、フランス共産党

に反対して、党の組織について考察の確かな退嬰主義 *immobilisme* を有利にした問題を、直接的抑止の雰囲気^(五)の復帰をマークするかということを無視することはできない。

人民戦線の方向の決定は、従って相次ぐ局面によって構成された。国民的決定の部分は、漸進的に増大した。出発以降出席した部分は、人々は、正確に、例えば階級対階級という方向の決定と同じ発展の過程を知らない、この方向の決定を研究するため、同じ分析の解釈の仕方を適用することを禁じる。一九三五年で、新しい方向の決定の性格を特徴づけるため、コミンテルン自体において観点の多様性は、この方向の決定の獨創性の一つである。もしもコミンテルンの推進は否定できないことであるとしても、人々は、その推進は創造的役割を演じない、しかし、その推進は一般化と統一、次いで最後は調整の機関として機能を果たすということの評価することはできる。

結局のところ、人民戦線の方向の決定は、統一戦線の方向の決定に対して単なる復帰ではない。しかし、人民戦線の方の決定は、しかしながら、新しい革命的戦略ではない。しかし、時期の終わりに、そのようなものとして、構成されるべき傾向は、明らかになる。用語の多様な意味の中で中間の、傾向は、矛盾した二元性は、恒久的に、諸共産党及びそれ以上に、諸共産党は、引き起こさせるべく貢献した、民衆運動をマークした、戦略上の方向の決定を表現する。^(五)

この論文の中で、人々は、人民戦線のイデオロギー的な局面と、創設者の役割を演じた、次いで人民戦線の冒険の中で本質的な当事者たちの一人であった、この観点から、共産党運動の地位を取り組むよう引き受ける。コミンテルンとその諸支部の方向の決定に捧げられたある研究は、従って人民戦線の分析を豊かにするように許すことができる。^(六)

二

第二の論文は、アルド・アゴ스티ー Aldo AGOSTI (イタリアの政治史研究者、トリノ大学教授 (政党史)) 『諸人民戦

線について』である。(五〇年振り。)

五〇年前、新しいかつ重要な経験は、深く国際的労働者運動史をマークしたし、あらゆる一連の国々の中で左翼によって取られた外形について恒久的な足跡を残した。すなわち、一九三六年二月に、スペインでそして数カ月後、五月に、フランスで、社会党員たち、急進党員たちと共産党員たちを結び付ける連合の基礎について、諸政府は、居を定めた。少しの時間後、一九三八年一〇月に、人民戦線政府は、なお他の半球の中で、チリに対して形作られた。

人々は、この経験の記念日が、その時まで政治的討論の意味をはっきり示す好機を引き起こさせたであろうということと言うことはできない。西欧諸国の左翼は、暫く前から、その固有な歴史の途切れ言葉を参照点として選択しながら、事を行う習慣を失ったということ、真実である。すなわち、『現実の社会主義』の国々において観察され続ける、記念の祭りの行き過ぎにもつともな反応。すなわち、機会があれば、過去の抑圧の側面を取る、同時に新しい道の同一性の喪失と騒がしい研究の徴候。その上に、共産党員たちと社会党員たちの間の諸関係は、最近の歴史の中で少しの先例を持っていた、闘争性の水準を到達した。すなわち、フランスで、特に、社会党と共産党は、決定的に、『三六年の精神』を埋葬した、そして過去に、無期限に、共同の主導権のすべての仮設を送り返したように思われる。スペインで、急速な及び取り返しのつかない遺産の変化を実現した、スペイン社会党 P S O E の大きな飛躍は、遺産は、反フランコ主義闘争の数年の中で、そして民主主義的推移の最初の時期の中で蓄積した、そして遺産は、その固有な政治的比重をゼロに帰するよう思われる、まさに信頼性の遺産を不毛なものにさせて見ようとしている、スペイン共産党の深い危機とともに調子を合わせて進んだ。

強い印象を与える問題、それは、この記念日を一〇年前に起こった記念日と分かれる、距離である。当時、チリに対して人民統一政府の粗暴な転覆の感動と政治的反響は、なお強烈であった。社会民主党員たちは、オーストリア、スウェーデン、そしてノルウェーで同様に、ドイツで政権の座に就いていた。イギリス労働党員たちは、まだサッチャー主義の波

によって溺れさせしなかつた。そして、幾つかの大小のヨーロッパの国々において（フランスとスペイン、だが同時にイタリヤ、ポルトガルとフィンランド）、政治的状况は、運動ですつかり出来上がったように思えたし、人民戦線の経験に参照させる、進歩的な及び独創的な諸経験の展望は、未来学の展望から除外されたように思えなかつた。人々は、国際的共産主義運動史における諸人民戦線の経験を思い出しながら、どれだけ『人民戦線諸政府の件について提起された諸問題は、ただ単に歴史にばかりでなく政治的实践に近づいた』か、当時のイタリヤの状況から、強調することに努めた、『マルクス主義今日』 *Marxism today* 誌（一九七六年七月）に対してホブスブーン E. Hobsbawm によって書かれた論文を思い出されることが出来る。一〇年後、ヨーロッパ左翼によって通行可能な政治的な道として、諸人民戦線の展望は、多くのその現代性を失つたように思われる。そして、それは、ただ単に、政治的情勢の、多少とも保守的なあるいは進歩的な波の短い満ち干の問題ばかりではない。それは、『複雑な』及び『脱工業の』社会の諸問題と福祉国家の危機を立ち向かうため、絶対に不適當であることを示す、一九七六年にある政治的価値で伝える、三〇年代の用語法である。同様に、『社会主義への推移』のモデルの未来に関する考察は、多くの考察の力を失つたように思われる。すなわち、当時妨害された確実性は、今日、少しの世界の事実であり、支配的な質問は、どんな民主主義とどんな社会主義か？、に係る。概して、それは、従つて、この記念日を取り囲んだ、相対的な無関心と沈黙を説明する、政治的異議である。しかし、それは、人民戦線に捧げられた史料編集の考察の真の失速の反映である。その理由を説明するため、この推理点に対して、考察のプランを位置を変える必要がある。

『人民戦線』は、生まれることは見た歴史的時期よりも、最も長い間生き残つた、政治的語彙の用語の一つである。その語源を確証することは、非常に興味深いであろう。私は、その二つの平行する語根を見付けながら、第三インタナショナルの政治的用語法に結び付けられる一つの語根を、左翼、とりわけフランスの左翼の統一された伝統の中で試みる必要がある他の語根を間違ふことを信じない。あらゆるケースにおいて、労働者階級の、ファシズムに反対して及び代表的な

民主主義の防衛と拡大のために戦うことに配置された、他の社会的諸勢力とともに同盟のテーマは、少なくとも三〇年間、政治的討論の中心点に留まった。テーマは、民主主義から社会主義への推移の可能な諸形態のテーマ、イクオール、ヨーロッパで労働者運動の考察の他の大きなテーマでもって、そして、古い植民地諸国において、帝国主義によって押し付けられた、経済的従属と政治的後見に対して植民地諸国の解放のテーマでもって、密接に絡み合った。用語は、異なった時期と状況において、互いに非常に違った意義を引き受けた。『人民戦線』は、一九三六年と一九三九年の間、フランスで、スペインでそしてチリで企てられた、政府の諸経験を持った政治的局面を意味する、決まり文句である。決まり文句は、これらの国々を溢れた、そして幾つかの指導部の中で深い影響力を行使した、政治的習慣の雰囲気、感受性を思い出す。(人々は、エイナウディ Einaudi の中に『マルクス主義史』の第三番目の巻において、ホップスボーン『知識人たちと反ファシズム』の立派な論文を再読した。) ファシズムと戦争の危険に反対する動員は、多数の国々の文化的生活を深くマークした。それは、アメリカ合衆国のケースであったように、組織された労働者運動の影響力は、重要な限界で常に合わせた、国々を含めて。確かに多くの側面によって、第二次世界大戦を先行した、年月において諸人民戦線の歴史は、一連の敗北の歴史である。フランスで、ブルム政府は、五月の選挙の勝利から生まれたし、労働者闘争の大きい波の絶頂期に政権の座に居を定めた。最初の改革する飛躍の後、ブルム政府は、フランスの社会の最も保守的な分野の圧力に抵抗しなかった、その内部の矛盾の事実によって衰退した、対独宥和政策支持者たち *munichois* の政治的近視に対する地位を残すため、そして、軍事的敗北によって途方に暮れた、国を、ベタン元帥の親ファシスト独裁に引き渡すため、二度繰り返して崩壊した。スペインで、人民戦線は、西欧民主主義陣営の及びその内部的分裂の政治的責任で結合された比重の下に、最後に敗北した。反ファシズムと反戦の動員は、世論と諸政府の方向の決定について、どうにか行動し遂げなかった、そしてその動員は、枢軸諸国の方に宥和のサイレンに、諸政府を備えさせることはできなかった。すなわち、次いで、独ソ協定は、着手された左翼諸勢力の統一に対して、致命的な打撃を耐えさせた。植民地と半植民地諸国において、

もしも人々は、中国のケースを除外するならば、反ファシズムと反帝国主義の間の諸矛盾は、出発から、ヨーロッパのモデルの機械的な模倣の側面を取った、急速に戦略を埋葬した。しかし、この角度から、三六年と三九年の間の諸人民戦線の経験を考えることは、減速するであろう。それらの経験は、初めて、次の年月において数百万の男女を動員することに当てられた、推進力となる考え *drive force* の大衆的用語に確認を可能にする。すなわち、代表的な民主主義を防衛するため、そして新しい用語でその民主主義を再考するため、共同の努力において集められた、諸勢力の新しい統一のセメントとして反ファシズム。果敢でない諸矛盾で一杯にしたとは言え、この推進力となる考えは、就中、窒息させられなかった、敗北させられなかったし、その考えは、戦争の間と同時にその後、大きな国々の態度にのしかかるのに到達した。

事実、人民戦線の綱領のある中心的な基本要素は、多様な目標と非常に区別された社会的及び政治的基礎でもって、第二の世界的紛争の間及び後、多数の国々において構成された、政府の連合コアリションの基礎となった。一九四六年のヨーロッパにおいて、人々は、この型の諸政府を政権の座にいなかった、国々は、少数であった。人民戦線の継続とともに明白な継続として、『人民民主主義』の決まり文句は、『一〇月への道』に同化しなかった、現存の諸社会の変革の道を示した、諸政府は、赤軍によって解放された国々において一般的な規則であった。しかし、政府の連合の内に共産党諸大臣の存在は、すべての一連の西欧諸国について、オーストリアからベルギーまで、イタリアからフランスまで、デンマークからノルウェーまで、この政治的モデルを計画した。そして、植民地及び半植民地諸国において、すぐ前のモデルとともにその異なった、しかし両立する変形であった、『広範な反帝国主義戦線』の諸政府は、広く普及した。いずれにせよ、スローガンとして自分のものであった、動員の成功を証明するため、用語は、冷戦の初めに生き残った。用語は、一九四四―一九四六年の経験と同様に一九三六年の経験の違った何かを代表した、背景の中でその成功を作ったけれども、実際に、用語は、当時からたくなにした、そして、用語は、民衆諸勢力の間に諸国家の連合ユニオンを対立させた、路線によって、反ファシズム闘争における一瞬民衆諸勢力の統一を発見した、民衆諸勢力の分裂を身動きできなくした。一九四七年から、それは、こ

これらの年月の間に、実は、人民戦線の用語は、『自由な世界』と『共産主義によって奴隷化された世界』の間、あるいは、他の斜面の用語を選ぶため、『進歩の陣営』と『反動の陣営』の間、イデオロギー的論争に結び付けられた意義で引き受けた。それは、当時、普通の出版物の中で、しかしアメリカの影響力の場所の中に含まれた国々の史料編集の中で、決まり文句は、同盟諸国をむさぼるように食べるため、その罨の中でその同盟諸国を引き付けるのに当てられた、共産主義運動の陰險な戦術の意義を選ぶということである。この読書は、戦争の及び『大同盟』の年月にばかりでなく、三〇年代の後半にも、傾向等を同一視しながら、一九四六―四七年に仕事に対して傾向と過程を転換した。そして、それは、その時に、冷戦によって生まれた断層の他の斜面について、左翼に位置づけられた政治的分析者たちと歴史家たちは、時間と空間以外の神話として、一種の失われた天国、イクオール、後悔された、そして、民主主義のためそして社会主義のため闘争の可能な視界として再提案された一種の黄金時代として提出された、諸人民戦線の時期を上演するように目指したということである。

用語の多価性、政治的語彙の中でその長い頑強さ、これらの経験の全体は、諸共産党と彼らの潜在的な味方たちの戦略上の展望について計画するように続けた、非常に激しい反映は、諸人民戦線について歴史的考察を企てるように長い間妨害した、諸要因である。イデオロギー的な図式は、ある時は明白な様式で、ある時はずっと鋭敏な様式で、判断と分析の基準として、長く生き残った。なお現在、もしも人々は、『現実の社会主義』の国々においてこの主題について出版された、巨大な山の書物と論文をざっと目を通すならば、あるいは、もしも人々は、人民戦線政策の起源もしくは色々な段階の主な記念祭の周りに開かれる、多数の科学的シンポジウムの一つに参加する機会を持つならば、人々は、更新の少しの徴候を唯単に発見する。大抵の場合、それによって歴史的な厚さ、限界と矛盾を表現することができない、そして国際的発展に、三〇年代におけるソヴィエト社会が知っている、悲惨な緊張に、この時期の間アメリカとヨーロッパ資本主義の急速な変化に限界と矛盾を結び付けることはできない、時期の弁解の評価は復活した、なお、これらのテーマの取り扱い

は、一瞬のようにイデオロギー的及び政治的戦いで理解されるし、取り扱いは、中央委員会の諸決議の敷衍的説明を越えて進まない、常任アカデミー会員たちに預けられる。貴重な諸文書基金の基礎についてずっと若い研究者たちの世代によって企てられた、研究の巨大な仕事は、辛うじて公式の集會に誕生するように始める、そして、その仕事は、二〇年以降、顕著な変更なしで再提案される、解釈の図式の枠楕の中で閉じ込められた、時間の大部分を残っている。この落担させる表の中で、幾つかの例外を指摘することは正しい。すなわち、これらの例外は、あらゆる社会主義諸国において現われる、しかし、それらの例外は、それらの歴史家たちが、言語の限定された普及によって少しも恩恵を浴されないのに、ハンガリーとブルガリア歴史家たちにあつてはずっとよく起こる。しかし、なお例外の問題がある、そして、もしも例外は、意味をはつきり示す方向の変化を予知させるならば、言うことはできるには早過ぎる。^(七)

われわれが便利さによって呼ぶであろう、西欧諸国の史料編集において、ある進歩は、もつと正確に明らかになった。すなわち、冷戦の当時の解釈のモデルは、長らく前から食み出られた。研究の真面目な仕事は、研究者たちの他の動向の側から（スペインで、フランスで、及びとくにイタリアでよく代表された、しかし、アングロ・サクソン諸国にまで及び連邦ドイツで諸支部でもつて）、同様に共產主義運動に関して、すべての情熱的な態度に無関心な研究者たちの側から（この観点から、たとえカーの研究の方法と結果は、部分的に越えられたように思われるとしても、E・H・カーは、彼の最後の日まで非の打ちどころのない厳格な教訓を与えた）、着手された。一部分はユーロコミュニズムの短かい時期によって影響を受けた、これらの最後の研究者たちは、すべての正統化の誘惑を断念したし、資料の分析と再読の真面目な努力に専念した。私は、なお進行中である、そして重要な結果を与えることはできる、仕事を思い出す。例えば、マルクス主義研究所によって晩年にフランスで着手された、史料編集の点検の勇敢な努力に伴われた、意味をはつきり示す諸文書資料の出版物を敬意を表することは相応しい。この努力は、モスクワで提出されたフランス共産党の諸文書の回収に続くし、諸文書を分類するそして諸文書をすべての研究者たちにとつつき易いものになるように決定に続く。

研究の結果に関して、この傾向は、とりわけ二つ続きの重要な貢献を提供した。一方では、コミンテルンの指導グループの中にあるいは各々の共産党の中に、資料の注意深い読書は、集めるように可能にさせる、態度の決定の多様性の鋭敏な分析をもって、諸人民戦線の戦略に結び付けられた、社会主義への移行のモデルの意味と限界は、詳細に再検討された。この再建の展望は、第三インタナショナルのマルクス主義と特徴づけたであろう、『経済主義』に対立させた、『政治の優位性』のある神話化に集中させた、イデオロギー的転覆の霧の中に、機会があれば、溺れたことは真実である。他方では、注意は、諸人民戦線の起源と最初の発展の問題を特に選択した。この軌道修正は、検討された対象（一九三四年の転換点）を越えて、全共産主義運動史にとって有効な、一般的な範列 *Paradigme* の価値があると主張した、解釈の図式を越えるように必然性、イクオール、必然性の結果であった。一方では、冷戦によってマークされた、しかし、ソ連邦の対外政策の利害の反映とモスクワから来た指令の機械的な適用として、人民戦線政策の誕生を提出する極左の傾向によって確認された、とりわけ英米の史料編集によって提案された図式は見付かった。すなわち、他方では、ヒトラーの政権の座に成立することによって引き起こされた、大衆の反ファシズムの動員の先頭にあるように、コミンテルンと諸共産党の能力に転換点を専ら帰する、この側面に認められたあらゆる重要性を否定した、『公式』共産党の史料編集によって提案された図式は、見付かった。これらの対立させた傾向とすべての二つの縮写器に反応して、モスクワでコミンテルンの諸文書は、閉じられたままでいるであろう限り、（強調点―筆者注）、解釈は、辛うじて十分な参考資料に基づくことはできなかったのに、ずっと複雑な解釈は、発展した。この解釈は、ソヴィエト対外政策の目標と、資本主義諸国の大部分の中で、そして先ず第一にフランスで労働者運動の基礎を勉強した、反ファシズムの統一の突破口の間、特定の比率において、偶然の一致、すなわち、相互作用の関係の存在を定義する、解釈である。後になって、他の諸研究（戦争の脅威に直面して二つのインタナショナルの政策について、ジュリアノ・プロカチ *Giuliano Procacci* の、及びディミトロフの役割について、クロイ・デオナトリの研究のように）は、ソヴィエト外交の要求について共産主義運動の路線の漸進的な意気消沈と、しかし

この過程は引きずり込んだ緊張と動揺を目立たせる、一九三五年より後の年月にこの関係の分析を広げるといふ長所があった。

重要性を強調するのは時宜に適っている、ひとたびこれらの固い参照を獲得したら、探検の分野は、広々としたままである。その時まで思い出された、継続と頑強の基本要素を指摘するように間違いがなく、前よりもっと、諸人民戦線をはっきりした年表のリズムの中に登録しながら、そして、これらの経験のそれぞれに対して、幾つかの指導部を目的とする接近を深めながら、諸人民戦線の経験を歴史主義化する必要があるということ、先ず最初に言うことが相応しいだろう。諸人民戦線の最初の時期、すなわち一九三四―一九三九年の時期を含む時期に限られるため、『人民戦線』の用語自体は、少なくとも歴史的諸問題の三つの違った分野を示す、事実を印を付ける必要がある。すなわち、共産主義と社会主義諸運動の方向の決定の用語、すなわち、諸インタナショナルとそれらのそれぞれ党の路線の用語、そしてその路線の相互作用の用語。すなわち、程度、深さ及び違った大きさによれば、一連の国々に発展される、大衆的社会運動の用語、すなわち、そして、諸人民戦線の連合は、権力を行使した、諸国において政府の諸政策と議会の多数派の活動の用語。これらの三つの分野のそれぞれは、たとえ分野は、明らかに相互に依存するにしても、分析の区別された規準を要求する。

第一の分野は、疑いもなく、研究は前進の最大限のことを記録した、分野である。これらの晩年の最も重要な現象は、コミンテルンと諸共産党の政策に捧げられた全体の図書館の側に、社会民主主義及び社会諸党についてもっと多数の及びもっと深く究明した諸研究、すなわち、フェルトリネリ、年表、*Annali Feltrinelli* は、前年社会主義労働者インタナショナルに捧げた、重要な巻の中で最高点に達した、諸研究が明らかになったということである。人々は、従って、長い間優勢であった、そして共産主義運動の内部に、違った諸勢力の集中の結果であった、政策の起源、成功及び失敗の諸原因を探し求めるのを目指した、変形させる観点を漸進的に修正した。この観点から、反ファシズム闘争において見当がついた、中産階級とこれらのブルジョワジーの部門の表現、すなわち『中間の』諸政党の役割の問題を著しく深く究明する必要

がある。これらの最後の政党に関して、労働者運動の諸党に関して同様に、方法と目標の均質化を横切つて、他の主題について非常に実りのある姿を現わした、比較史の研究を發展させることは、非常に興味深いであろう。

諸問題の第二の分野は、もっと重要な遅れを記録する。大恐慌の年月の間労働者階級の生活諸条件、資本主義社会の諸構造の中に登録するだろう、形態学的な諸変更、その時まで消極的な社会諸階層の実施の諸形態と力学、ある運動に変えられたやり方で、諸人民戦線の政策：われわれは、採択された歴史的諸研究より、もっと多くのメモもしくは物語の幸せな頁、もっと多くの写真と映画のお陰で消すことができなイメージを持っている、政治的文化の、精神傾向（心性）及び民衆的実行の進展。ユルゲン・クチンスキー *Jugen Kuczynski* の『資本主義の下に労働者状態の歴史』という先駆的な研究は、何の疑いもなく、いつものイデオロギー的な基本原理によって汚されたブレハブのテーゼを証明するのに当てられた、静止した図式について再び閉じた、東欧諸国の史料編集について確かな影響力を行使した。人々は、更新の有望な徴候を発見する（例えば、非常に興味深い研究と計画を含む、社会運動誌 *Movement social*、一九八五年、一三五号の最近の特別号は、そして日常生活について九月にパリで開かれたシンポジウムはそれによって証言する）。しかし、今日まで、*Rii* ヴィニエス、『国際的カタローニャ』。そしてカタローニャの例として『前線民衆主義』、バルセロナ、一九八三年の研究のような研究は、政治史と社会史の統合を成功し、幸わせなしかし孤立した例外を代表する。

諸問題の第三の分野に関して、分野は、同時にずっと複雑な及びずっと具体的な一連の諸問題を提起する。フランスで及びスペインで人民戦線諸政府の諸経験は、非常に違った歴史的軌道の出発点であったし、お互いに同化することはできない。そのようなものとして、それらの経験は、諸経験の特異性の中で研究されねばならない、しかし、それらの経験は、二次的ではない、すなわち、それらの経験は、それらの国民的な可能な変形を越える、具体的に政治的戦略は実証される時期を代表する、側面を共有する。全体的な計画の抽象的なモデルにに応じて、結果を測定することは問題ではない。すなわち、もしもそれは、労働者運動の及び特に諸共産党の現存として過去を授けた、イデオロギー的及び政治的展望の形態

の下にないならば、比較史の観点における結果をお互いに対決させることは、確かに非常に興味深いであろう。この種の一つの作戦は、『モデル』として一つの経験を他の経験に対立させるよう、当時まで非常にしばしば知られた、すべての誘惑を放つたらかしにして置かなければならない。もちろん、人々は、内戦の間共和国によって、実験された、前進した社会的民主主義の『スペインのモデル』は、『進歩的な民主主義』のトリアッティの考え方についてはかなりでなく、戦後の時期の間東欧のある諸共産党の自主的な周到な作成についても、深い影響力を行使したことを認めねばならないだろう（この意味で、多くの人たちが、スターリンの抑圧によって除去されたもしくは粛清された、スペイン戦争の在郷軍人たちによって演じられた役割は、深く究明されて当然であるであろう）。そして、同じやり方で、人々は、フランスでブルム政府が対決させた中心問題のレヴェル（政治的及び文化的伝統の強いブルジョワジートともにその清算すること、議会民主主義の枠内で資本主義国家の構造の深い変化の諸問題と具体的に測られること）は、ヨーロッパ左翼は現実に出合う、中心問題の疑いもなくより近くの挑戦を代表したということを否定することはできないであろう。しかし、新しい及び独自の結果を生産するため、二つの経験の比較的分析は、狭い意味で政治史の次元を越えて進まねばならないであろう、そして、比較的分析は、他の社会科学から来た研究の貢献と技術に向かって開かれねばならないであろう。ポール・ウァーウィック Paul Warwick、『フランス人民戦線。立法的な分析』、（一九七七年、シカゴとロンドン）の立派な研究は、単に国民的な政治的体系の、その体系の歴史的形成の及びその体系の特殊な力学のもとと複雑な分析において、人民戦線の諸経験の歴史を挿入しながら、人々が到達することができる、独創的な結果の最初の実例である。一九三六年の国政選挙の後、フランスで及びスペインで構成された諸政府を指導した、政治の及び議会の職員について大部分諸研究は、なおまだ残っている *resistent à faire*、そして、綱領の表現にばかりでなく、具体的に決定された議会の諸措置も、分析の経済的及び社会的政策の几帳面な分析は、まだ残っている。

結論として、もしも諸人民戦線の経験は、政治的活動の場について経験の推進用の力を使い果たしたということ断言

するよう時機尚早であるならば、人々は、安心して、その経験は、歴史家たちの独創的な考察に対して、多くの側面によってなお開かれる分野を代表することは、強調することはできる。^(八)

一九三〇年代の中で発展された、ヨーロッパの西と同様に東に連合諸政府の枠内に第二次世界大戦の直後にある措置の中で延期された、それ以来ある諸人民戦線によって描写された、他の諸人民戦線によって神話で示された、諸人民戦線の経験は、その経験は、五〇年後、ある現状を維持したか、あるいはその経験は、歴史家に対して研究の対象であると同様に全ての創造力を失ったか。^(九)

——一九八九—二〇三二、成稿——

(一) Cahiers d'histoire de l'institut de recherches marxistes (CHIRM), Le Front populaire à travers le monde, Sommaire n° 27, 1987, p. 7.

(一) Serge Wolkow, Le Front populaire comme orientation stratégique du mouvement communiste, in: CHIRM, n° 27, 1987, p. 26-27.

(二) Ibid., pp. 11-18, 27.

(三) Ibid., pp. 18-23, 27.

(四) Ibid., pp. 23-26, 27.

(五) Ibid., pp. 2-3.

(六) Aldo Agosti, Sur les fronts populaires, in: CHIRM, n° 27, 1987, pp. 28-32. アルド・アゴステイ、石堂清倫訳『コミンテルン史』現代史研究所、一九八七年、特に、七五四頁、七五九頁、七九一頁、七九九頁、八六四頁参照。

(七) Ibid., pp. 33-37.

(八) Ibid., pp. 2-3.

補注

(一) 拙著『フランス人民戦線論史序説』法律文化社、一九七七年、二〇八—二〇九頁、一九〇—一九一頁、九一頁参照。

(二) 同書、一七七—一八一頁参照。アゴステイ、前掲書、七九〇頁参照。

(3) 同書、一一九―一二五頁、一四八頁、八四―八五頁、一三九頁参照。

付記

(一) 主要参考文献は、Cf. Michel Cadé, *Le parti des campagnes rouges, Histoire du Parti Communiste dans les Pyrénées-Orientales 1920-1939*, Vingça, 1989, Serge Berstein, *La France des années 30*, Almand Colin, Paris, 1988, Alexander, M. S./H. Graham (ed.), *The French and Spanish Popular Fronts, Comparative Perspectives*, Cambridge U. P., Britain, 1989, etc.

(二) 筆者は、今年、Centre de recherches d'histoire des mouvements sociaux et du syndicalisme (CRHMSS), Université de Paris 1, Bibliothèque, 12, 1989 を寄贈されている（一九八九年一〇月三一日到着）。フランス人民戦線の時期は、一九八八年中で一九種（修士号九種、博士論文一〇種）である。外国で八〇一種、国内で四〇三種、合計一、二〇四種である。